

本報告書の概要

- 生成 AI の進展やビジネスモデルの破壊的な変化を受け、求められる能力も変化している。取り巻く環境変化を前に、高等教育機関と産業界それぞれが主導してきた従来の日本の人材育成は大きな転換期を迎えており、新たな時代に即した教育・人材育成の確立が急務になっている。
- 本会では、長年、提言活動を通じて教育行政における課題認識の共有に寄与してきたが、制度面等の変化につなげる上では課題もあった。本 PT では、こうした課題認識の下、高専、大学、大学院の学生、教職員を対象にキャリア教育や学び直しに関する 5 つの実践活動を実施した。その結果、経営者との対話をはじめとする実社会との接点、さらに学びと就業を行き来する経験が、学生や教職員の自律的なキャリア形成や行動変容を支える意識の獲得を促すことが明らかになった。

<各活動における主な示唆>

- 高専：多様なキャリア像と必要なスキル・経験の共有による理解促進が学習意欲を高める
 - 大学：対話を通じた異なる価値観との接触や意思決定プロセスの体感がキャリア観と社会認識の深化を促す
 - 大学院：新たな価値創出には、学び直しとそれを促す環境づくりが必要
 - 教職員：大学職員の意識・行動変容に組織的な理解・支援が不可欠
- 高等教育機関と企業との連携は、双方の抱える課題を解決するタイムリーな活動であり、実際に新たな価値を創造する人材の育成には、双方の協働が不可欠であると再認識するに至った。

<PT 活動全体を通じた主な示唆>

- ① これからは「学習と実践の循環」を通じて自律的に学び続けられる人材が重要
 - ② 能力形成の主体は個人へ
 - ③ 企業は人材を「受け取る」関係から、高等教育機関と「共に育てる」連携へ
 - ④ 高等教育機関は「知識を授ける」存在から、「学び方を育む」組織へ
- 今後、日本の経済成長に向けては、“学ぶ”・“働く”の往還を教育機関と企業が共に支える基盤の構築に加え、「個人」の意識変革が不可欠である。特に、高等教育機関は学生と社会の結節点として、学びを社会課題の解決に向けた挑戦と結び直す重要な役割を担っている。
 - 以上を踏まえ、本会としても実践活動の継続を通じて、高等教育機関との連携をより一層強化させるとともに、AI 時代における人材育成のあり方について検討を深めていく。